

機関番号：17102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520543

研究課題名（和文）朝鮮古代中世金石資料の形態と銘の歴史・文化学的調査と研究

研究課題名（英文） Research and study on monumental inscriptions of ancient mediaeval period in Korea

研究代表者

濱田 耕策 (HAMADA KOSAKU)

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：40137881

研究成果の概要（和文）：

国内の8大学の図書館において、「日本に所在する朝鮮古代中世の金石資料拓本」等を調査した。その目録を統合して「日本に所在する朝鮮金石文拓本目録」を作成した。その過程では、訪韓して韓国各地の博物館に金石資料を実検し、これまでの各種の訳文を再検討して、これらに修正を加えた。

この日韓にわたる調査の結果、これまで日韓の歴史学界では、朝鮮古代の金石資料は部分的に研究に活用されることが多かったが、そのなかで金石資料の4件について、全面的な文字に校勘を加えて、その歴史的な意義を踏まえた専論4本を公表した。また、課題に関する新刊2冊を書評し、九州国立博物館に企画展示された拓本については、新聞紙上にその学術的価値を紹介した。

研究成果の概要（英文）：

I have researched on “The Epigraphy from Ancient and Medieval Chosen,” which are currently preserved in eight university libraries in Japan. After combining the catalog of the documents, “A Catalogue of Korean Epigraphy Preserved in Japan” has been completed. In the process of carrying out this project, I have visited museums in various regions in Korea, conducted fieldwork on epigraphy outdoor, and reexamined and revised existing translation of these sources. After conducting the research in Japan and Korea, I have noticed that in the field of Japan and Korean history, these epigraphy have been frequently referred by researchers. Therefore, on these four epigraphy, I have published four academic journals on comparison of letters, and historical significance of these materials. Moreover, I have reviewed two latest books on this topic. Also, regarding the epigraphy preserved at Kyushu National Museum, I have published an article in Nishi Nihon Newspaper. As written above, throughout this research, I have examined the political purpose of creating epigraphy and its relations to the society.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
— 年度	—	—	—
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学：史学一般

キーワード：朝鮮古代史・中世史、金石資料、石碑、鐘銘、顕彰、拓本

1. 研究開始当初の背景

(1) 歴史事象の後に編纂された史料を尊重しつつもそこに編纂には政治が働く。そこで、当該時代の金石資料の価値を評価し、その問題点を意識しつつ、これらに調査と研究を加える。これによって、多いとは言えない朝鮮古代・中世史の編纂史料を補完し、当該時代の歴史をより豊に理解する手法を獲得することの必要性を強く認識していた。

(2) 朝鮮古代・中世に作成された金石資料のなかに、中国古典が典拠としていかに受容されているのか、と言う問題に、朝鮮における「小中華意識」の醸成過程を理解することにも知的関心が及んでいた。この問題は特に古代末期の崔致遠が撰文した四件の高僧碑について顕著に相当するばかりでなく、亀趺や螭首で構成される碑の形態も調査の対象となる。

(3) 朝鮮金石文の特有性の発見に関心が及んでいる。各種の金石資料を通して、石碑の建立し、鐘銘を彫る種々の意図と目的を考察し、また、銅鐘を鑄造し銘を鑄だす、それらの形態のなかに朝鮮古代・中世の特異性を考察する必要性を目的としている。時代幅を三国時代と高麗の間に統一新羅を置くことによって、新羅の固有と唐制の受容とその変容の変遷庫を把握することが可能となる。

(4) 韓国の史蹟を訪問すると、しばしば石碑の文字が自然消滅したばかりでなく、人為的に削除されていることを見る。この事例は日本植民地時代の石碑にしばしば見られるばかりでなく、古代、中世の石碑についても例外ではない。外圧ばかりでなく、韓国社会の思潮が石碑に破壊等の力が及んでいるのである。このように石碑をめぐる政治背景にも関心が及ぶ。

2. 研究の目的

(1) 朝鮮古代・中世の金石資料を調査・研究して、当該の歴史研究の資料としての精度を高めることをまず目的としている。日本の植民地時代にも金石資料についてその所在地と形態の分類など基本的な調査とその報告は進められており、葛城末治による概括的、網羅的な研究があった。しかし、この資料を活用した歴史研究の成果は多くはなかった。また、その後、朝鮮金石学は継続的に調査と研究が進められて来なかったから、碑文や鐘銘の釈読を確認する作業が求められていた。

金石資料とその拓本を対照すること、この作業の上に、編纂史料に依拠した、朝鮮古代・中世の歴史像に新しい知見を加えることが期待された。

(2) 植民地下の朝鮮では、朝鮮総督府のもとで、金石資料の調査と保存が進められた。また金石資料に銘記された文字も調査されていた。しかし、それらを継承し発展させる調査と研究は 1945 年以後には盛んには現れていなかった。さらに、高度経済成長期にある韓国では 1980 年代以降、金石資料が新たに発見されることが続いており、その研究と整理が盛んに進められている。そこで、日本に於ける朝鮮金石学の再出発と韓国学界との交流を進めることを通して、金石資料研究の多視角的発展をめざし、歴史研究に寄与することが希求された。

(3) 朝鮮史上、石碑が多数に建立され、金工品もまた多数に鑄造されており、今日にもそれらは文化財として遺存し、韓国内外の文化財保存機関に保管されている。これらの金石資料について、銘記された碑文等を調査し、その歴史学的研究を進めるとともに、金石に歴史的事跡を記録し、同時に顕彰することの政治社会とその文化を考察することも金石資料の研究では等閑視出来ない課題である。この課題の研究を通じて、今日的にも石碑の建立や保護に表れつつける韓国の政治社会を考察することも課題としてある。

3. 研究の方法

(1) 朝鮮古代・中世金石資料の調査と研究の基礎作業として、日本に伝存する朝鮮金石資料の拓本を所蔵機関別にリストアップする。まず既刊の所蔵目録を参照するとともに、新たな所蔵情報を加える。これに加えて、『東文選』（徐居正らの撰、1478 年成る）に編集された朝鮮の文人の撰になる碑文、鐘銘等をもリストアップして、朝鮮における金石資料の全体像を把握した。

(2) 日本国内では天理大学図書館をはじめ 8 大学と東洋文庫ほか 4 つの図書保存機関に朝鮮古代・中世の金石資料の拓本の所在地を調査し、碑字と鐘銘について『朝鮮金石総覧』（朝鮮総督府、大正八年）や『訳註 韓国古代金石文』（韓国古代社会研究所、1992 年、ソウル）の既往の釈文と対照する作業を進め、新たな釈字も得るとともに、既往の釈文の誤りを正した。

(3) 韓国ではソウル大学校ほか成均館大学校、東国大学校の3大学と韓国学中央研究院、さらに国立中央博物館、慶州博物館、扶餘博物館の3国立博物館に金石資料と拓本を調査し、碑字を確認した。また、崔致遠の撰文になる高僧碑の2碑を忠清南道、慶尚南道の現地に調査した。後者の碑文調査の一部は「5. 主な発表論文等」のなかの②に活用されている。

(4) 日韓にわたる拓本を含む金石資料の調査をもとに、既往の調査報告・研究と対照・検討して、「劉仁願紀功碑」「聖幢和尚碑」「広開土王碑」「新羅聖徳大王神鐘之銘」の4件の金石資料については個別の研究を進め、成果を公開した。「5. 主な発表論文等」を参照)

4. 研究成果

(1) 「聖徳大王神鐘之銘」(新羅・771年の鑄造)の鐘銘を国内と韓国に所蔵される取拓の時代を異にする各種の拓本を校勘した上で、かつ鐘銘を実検して鐘銘を確定した。そこで、鐘銘を書き下し、その現代語訳をも行った。書き下しの一部については早くに関野貞が試みていたが、鐘銘の全面的な釈文と現代語訳は日本では最初の成果である。成果は「5. 主な発表論文等」の〔雑誌論文〕の⑨として公表し、また同②③においても、同鐘銘が中韓の古代史のなかで生じた相互認識を究明したが、この成果はさらに活用されることを拙見とともに提示した。

(2) 百済滅亡に追い遣って、その故地に駐留する唐軍が将軍の功績を記念して建立させた「劉仁願紀功碑」について、日本国内と韓国において拓本を調査し、また扶餘博物館においては原碑を精査した。この調査と精査をもとに碑文を確定し、碑の書き下し文と現代語訳を行った。これは同碑に関する日本では初の調査と研究の成果である。同碑ははやくに大きく人為的に破壊されており、「白村江の戦い」(663年)に至る部分の碑文の消失はまさにそれである。古代東アジア史研究に確かな史料集等提供したと言える。「5. 主な発表論文等」の〔雑誌論文〕①参照)

(3) 広開土王碑については先学の成果を参照しつつ、碑文の釈文とその現代語訳を行っていたが、その延長として、同碑に関する先学の専著3冊を書評し、その研究史上の意義を評価し学界に報じた。また、九州国立博物館に企画展示(「馬 アジアを駆けた二千年」)された長崎西高所蔵拓本については新聞紙上に、学習院大学東洋文化研究所所蔵拓本については解説冊子に、その歴史的価値

を紹介して、この雄碑が伝える東アジアの古代史像と拓本の歴史的価値を平易に広く社会に伝えた。「5. 主な発表論文等」の〔雑誌論文〕④⑥⑧⑬補、参照)

(4) 断碑の「聖幢和尚碑」について、韓国国立中央博物館に碑と拓本を、また天理図書館には拓本を調査して、古代日韓関係に関わる部分の碑字を中心に調査し、解釈を加えて、韓国の論集に発表した。「5. 主な発表論文等」の〔雑誌論文〕⑩参照)

(5) 「日本に所在する朝鮮金石文拓本目録」を充実させた。また、『東文選』に編集された朝鮮古代・中世の碑銘も本『目録』に収録して、朝鮮における金石資料の形態の全体的な把握と銘文・碑文を文献上にその所在を確認するうえでの便宜を図った。

(6) 朝鮮の石碑は7世紀半ばを境にその形態と文字の書体と文章構造に制度と文化のなかに進行した「唐風化」が顕著に現れる。その嚆矢の位置にある石碑が「4. 研究成果」の②で取り上げた唐軍が建立した「劉仁願紀功碑」である。金石に為政者や軍人、文人の功績を顕彰する行為は前近代では国家の側から独占的に行われている。それ故に顕彰のなかに政治的メッセージが含まれている。それが為に、政治状況に変化がおこると、碑文の改削や石碑の破壊までも為された事例を発見することができる。今日にも韓国社会では石碑を建立することは政治性を濃く持っていること、また「北関大捷碑」の返還をめぐる日韓と韓国・朝鮮の見解に現れた事例に顕著であるが、石碑をめぐる政治課題は今日にも尚潜在していることを確認した。

(7) 研究成果の(2)に関連して、熊本県と同・菊地市や韓国・忠清南道の依頼に応じて、熊本県菊地市と山鹿市に跨って位置する鞠智城の歴史的意義について、7世紀の百済と9世紀の新羅の歴史との関連においてその性格について考察して、広く社会に報じた。「5. 主な発表論文等」の〔雑誌論文〕⑤参照)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計13件)

① 濱田 耕策「劉仁願紀功碑の復元と碑の史料価値」『川勝守・賢亮博士古稀記念東方学論集』査読無 2011 掲載決定

② 濱田 耕策「日本と新羅・渤海」石井正敏ほか編『律令国家と東アジア』吉川弘文館、

査読無 2011 92-122

③濱田 耕策「朝鮮古代(新羅)の「近中華」意識の形成」森平雅彦・岩崎義則ほか編『人文学 1 東アジア世界の交流と変容』九州大学出版会、査読無 2011 39-58

④濱田 耕策「書評 武田幸男著『広開土王碑墨本の研究』」『歴史評論』査読無 2011 78-83

⑤濱田 耕策「朝鮮古代史からみた鞠智城」笹山晴生監修『古代山城鞠智城』山川出版社、査読無 2010 83-105

⑥濱田 耕策「学習院大学東洋文化研究所し所蔵の高句麗広開土王碑拓本の資料的意義」『知識は東アジアの海を渡った—学習院大学コレクションの世界—』丸善プラネット、査読無 2010 102-110

⑦濱田 耕策「新羅の遣唐使と留学生」『東アジア世界史研究センター年報』4号、専修大学 査読無 2010 67-74

⑧濱田 耕策「書評 武田幸男著『広開土王碑との対話』」『朝鮮学報』209 輯 朝鮮学会 査読無 2010 83-91

⑨濱田 耕策「現代日本語訳『新羅聖徳大王神鐘之銘』」『史淵』146 輯 九州大学大学院人文科学研究院 査読無 2009 81-100

⑩濱田 耕策「研究余滴：新羅聖幢和上碑の二文字—薛仲業の来日をめぐって」『韓国古代史研究の現段階』(石門李基東先生停年紀念論叢) 2009 ソウル・熊津出版社 査読無 701-709

⑪濱田 耕策「新羅の遣唐使—上代末期と中代の派遣回数—」『史淵』145 輯 九州大学大学院人文科学研究院 査読無 2008 127-153

⑫濱田 耕策「新羅の遣唐使と崔致遠」『朝鮮学報』206 輯 朝鮮学会 査読無 2008 1-20

⑬濱田 耕策「書評と紹介・徐建新著『好太王碑拓本の研究』」『日本歴史』第 708 号、日本歴史学界 査読無 2007 101-104

(補)「長崎西高所蔵の広開土王碑拓本」
「西日本新聞」2010年8月25日付 朝刊

〔学会発表〕(計 10 件)

①濱田 耕策「劉仁願紀功碑の復元と史料価

値」九州史学会平成 22 年度大会 2010 年 12 月 12 日 福岡市・九州大学

②濱田 耕策「新羅時代の蔚山港口」韓日関係史研究会 2010 年 11 月 20 日 韓国・蔚山市・蔚山大学校

③濱田 耕策「百済の歴史からみた鞠智城」第 3 回大韓民国忠清南道シンポジウム 2009 年 7 月 9 日 熊本市

④濱田 耕策「朝鮮古代史からみた鞠智城」古代山城鞠智城を考える(鞠智城東京シンポジウム) 2009 年 7 月 25 日 東京都

⑤濱田 耕策「『桂苑筆耕集』の刊行と日本現存本」『桂苑筆耕集』の翻訳記念国際学術大会 2009 年 10 月 31 日 韓国・ソウル市・西江大学校

⑥濱田 耕策「新羅の遣唐使と留学生」古代東アジアの交流と留学生(専修大学東アジア世界史研究センター) 2009 年 11 月 21 日 東京都・専修大学

⑦濱田 耕策「『新羅聖徳大王神鐘之銘』の邦訳及び銘の史的意義」九州史学会平成 20 年度大会 2008 年 12 月 14 日 福岡市・九州大学

⑧濱田 耕策「東アジア海域と鞠智城」日韓シンポジウムⅡ 「古代山城・鞠智城の歴史的価値」2008 年 11 月 8 日 熊本県・菊池市

⑨濱田 耕策「新羅の遣唐使と崔致遠」朝鮮学会 公開講演 2007 年 10 月 1 日 奈良県・天理市・天理大学

⑩濱田 耕策「韓国古典の日本語翻訳の現状と課題」「韓国学古典資料の海外翻訳の現状と課題」韓国・啓明大学校韓国学研究院 2007 年 5 月 17 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

濱田 耕策 (HAMADA KOSAKU)

九州大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：40137881

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし